

卒業おめでとう

歯学部長 花田 晃 治

第31回生の皆さん、卒業ほんとうにおめでとうございます。長い間の努力に敬意を表します。春からは研修医、大学院生、勤務医など、それぞれの道に進みます。それぞれの道は皆さんが、最良の道として選び、心に決めた道です。これからは日々、自分を磨くための目標を設定して努力してください。これからしばらくの過程は異なるかもしれませんが、将来は歯科医学、歯科医療に携わり国民の健康の維持・増進に寄与するという目標は同じであると思います。日本海側唯一の国立大学歯学部で学び、卒業して社会に出ていく皆さんは、特に国民を意識して国民に貢献できるために努力してください。社会はそれを強く求めています。そしてどこかで貢献できたとき、自分の大きな満足感をうるでしょう。卒業にあたり、6年前を振り返ることも大切なことと思います。何を求めて新潟大学歯学部を受験し、入学してきたのでしょうか。新潟大学歯学部で何を学ぼうとしたのでしょうか。そしてそれは達成されましたか。これから長い人生、歯科医療人としての自分の将来を想像するときに、今この時点で、振り返ってみることは必要かもしれません。そのなかから歯科医療人としての使命感が確認できるでしょう。

地域の時代といわれてからすでに随分と時間が経ちました。皆さんが卒業した新潟大学は地域拠点大学になるべく努力を続けています。大学で行われる研究も、診療も新潟という地域に還元することで社会に貢献するといわれます。新潟という地域にある大学として、これは重要な一面です。私は、もう一つの面も重要であると考えます。皆さんは、日本全国から集まってきました。そして自分の育ったところに帰っていかうと思っている人がいます。その地で行うであろう研究、診療を

その地域に還元することで社会に貢献することができます。また、これから行く地域は生まれ育ったところではないかもしれません。その地で行うであろう研究、診療による努力をその地域に還元することで社会に貢献することができます。さらに、世界のどこかの地域に行こうとしているかもしれません。その地域で努力し貢献してください。それが新潟大学歯学部が目指している地域密着の姿です。

医療と歯科医療の進歩・発展によって超高齢化社会に向かっている日本において、今や「衣食住」に困窮している人はいないでしょう。しかしながら「医食」という点では多くの問題を抱えています。う蝕疾患・歯周疾患・顎関節疾患などが複雑になり、疾病構造も変化してきています。高齢者は慢性疾患を抱えながらも、いかに質の高い生活を送れるかを求めています。「医食」の改善が急務です。高齢者に限らず青年期、壮年期から口腔内の環境を向上させて楽しく食べて楽しく暮らせることに貢献できるのは皆さんです。

今、社会は広い教養、豊かな感性、きびしい倫理観を持った歯科医師を求めています。これまでに皆さんが受けた教育だけでは十分ではありません。患者さんに信頼され、愛される歯科医師を求め続けるためには、生涯を通じた学習、研修が必要です。一人でも多くの患者さんに好かれるように努力してください。達成したときの喜びは計り知れないものとなるでしょう。いつかどこかで輝いている姿に会えるのを楽しみにしています。それでは元気で。

第31回の卒業生の皆さん、卒業おめでとう

歯学部附属病院長 河野 正 司

東には飯豊山や五頭連峰、南には八海山をはじめとする越後三山、そして海岸からいきなりそびえ立つ角田山と弥彦山に囲まれた、美しい自然の豊富な越後平野の中で、新潟大学歯学部の6年間の学生生活を過ごされ、青春時代の貴重な思い出として、大学を巣立って行く皆さんに、心からのお祝いを申し上げます。

人生いかに過ごすべきかと哲学的な討論に、あるいは青春の華やかなページをかざる恋愛論に、さらには歯科医学の将来像についてと、悩み、楽しみ学生時代を謳歌してきたことと思います。過ぎ去ったこれらの出来事は学生時代の良い思い出として、これからの人生の糧として、一生残ることと思います。

さて、晴れて歯学士となった皆さんは、直ちに臨床医として実社会へ第一歩を踏み出す人、研修医や大学院生として大学で臨床研修や歯学研究に取り組む人など様ざまでありましょう。これまでの学生生活のように、隣人のノートや行動を追いかけていけば、大学の学生護送船団方式に守られて何とか過ごせた社会とは異なり、いよいよ隣人と差をつけなければ存在していけない社会へと、漕ぎ出て行く諸君。やっとなり諸君の実力が社会に評価される立場に立ち、意欲満々のことと思います。

何れの道を歩もうとも、本学部で培われた「科学する心」と、慈しみの心をもって患者さんのために尽くす「医の心」を決して忘れないで下さい。「患者さんのために」をキーワードとして「患者

さんのために何をすべきか、何が出来るか」を常に自らに問い、真剣に考えて下さい。

漱石の「夢十夜」の中に、運慶が木から仁王を彫る話があります。手つきは無造作だけど、思うがままの像が誕生する。なぜなら運慶にとっては、仁王は最初から木に埋まっており、それを鑿と槌の力で掘り出すだけだからだ、という話です。諸君にとっては、歯科医学が運慶にとっての仁王のようなものであってほしいものです。卒業後もたゆまぬ研修を続けて、そのレベルまでに達してもらいたいと願っております。両肩を怒らせることなく、自然体にて歯科医学の最前線で活躍できるように！

諸君は「雪椿」という花をご存じでしょう。

早春に一重の紅の花を、雪の下で見事な姿を見せてくれる、美しい花です。新潟を流れる阿賀野川の川岸に原生している、早春を告げる新潟県の花でもあります。寒い冬を耐え、じっと雪の下で体力を蓄えたつぼみが、早春にすべての草花の「さきがけ」となって、紅の一重の可憐な花を見事に見せてくれます。新潟大学歯学部で育てられた歯科医師の「さきがけ」としての種が、諸君らによって広く世界中に播かれるのです。この種に水を与え、栄養を加え育てていくのは、諸君自身であります。十分に育まれた種が草花の「さきがけ」としての雪椿のように、豊かな芽を出し、大きな花を咲かせてくれることを期待しております。

31期生巣立つ 一卒業祝賀・謝恩会一

小児歯科学講座 野 田 忠

3月23日、快晴の暖かな日和に恵まれ、歯学部31期生62名は卒業式を迎えました。午前10時半、歯学部玄関前には着飾った卒業生たちが、晴れやかな顔で記念写真のひな壇に並びました。卒業式は1時から新潟市体育館で行われ、歯学部の照光さんが「新大で学んだことを日本と国際社会で遺憾なく発揮してゆきたい」と答辞を述べました。

4時半からは、イタリア軒で卒業祝賀・謝恩会が行われました。マルコポーロの間において、保護者、教官、同窓会や歯科医師会からの来賓の方々の前で、花田学部長より一人一人に学位記の伝達が行われ、学部長より卒業のはなむけの言葉が贈られました。来賓の方々からもご祝辞をいただいた後、河野病院長の発声で乾杯をし、祝宴に入りました。

謝恩会は、昔テレビのアナウンサーをしていた照光さんが、答辞の雰囲気とは違った軽妙な司会で、祝宴を盛り上げました。謝恩会には教授をはじめ、基礎・臨床の直接指導した教官、総合診療室でこまめに面倒をみてくれた看護婦さん、それ



に多数参加された保護者の人たちが、卒業生たちと卒業を喜びあいました。

謝恩会恒例の出し物では、単純なジャンケン勝負ながら、大いに盛り上がり、卒業生の母親の方が、本日の一番幸せな人になりました。

退任される小澤教授のお話があり、また贈られた花束を抱えて教授が一言ずつ卒業生に贈る言葉を述べた後、前途を祝って万歳を三唱し、にぎやかな卒業祝賀・謝恩会が幕を閉じました。



歯学部卒業にあたって

6年 片岡 照二郎



入学したころにはまだまだ先のものと思っていたものを迎えることができそうです。ここまでくる道のりは自分にとって大変険しいものでした。その中で最も印象に残っているものは6年生の臨床実習です。臨床実習は、これまでの静かで冷たい自分に都合のいい状態にできる模型でもなく、毎日顔を合わせる学生でもない、お口の中に何かしらの不満、不快感を持っている患者さんに対する治療です。当たり前のことですが、自分の担当している患者さんと周りの学生の患者さんとはお口の状態は異なり、何も考えないで周りの学生を真似することなどはできず、自分でどのような治療が一番その患者さんが満足するかを考えていかなければなりません。知識の浅い狭い自分が考えた治療内容では、とても患者さんが満足するようなものではなく、先生方から厳しい注意、指導を何度も受けました。そうして考えた治療内容も実際に総診で行うとなると、今度は思うようにいきません。そのたびに先生方から厳しい注意、指導を受け、また患者さんに大変迷惑をかけるということが何度もありました。(何度もというよりも毎回です。)またその日突然予想外の治療を行わなくてはなくなり放心状態になり、先生に指示されるように行おうとしますが、全然ダメで先生、患者さんに大変迷惑をかけることもありました。技工でも時間がかかり患者さんを長い間待たせ、ギリギリになって特別に夜遅くまで先生に残って見てもらいました。このように臨床実習では迷惑のかけっぱなしでしたが、そのおかげでとても多くのことを学ぶことができ、とても充実した1年間でした。患者さんもこんな自分に不満はたくさんあったことなのでしょうがそれを口や表情に出さず、逆に励ましてもらったり本当にありがとうございました。

この原稿を書いている数日後には国試が待つて

います。歯科医師過剰などの問題で年々厳しくなっていますが、歯学部に入ったからには歯科医師免許を取らなくては何にもなりません。国試に向けて勉強していると特に思うことがもっとももっとまじめに勉強しておけば良かったということです。1年、2年、3年、4年、5年、6年と学部で学んでいるときは、「なんでこんなことやるんだ?」とか、「こんなこと知っていてどうするんだ?」とか、「よくわからないからいいや」とか考えていたけどその一つ一つがこういうことなんだと今ごろ少しずつわかってきました。僕はまだ歯科医師でもないのだからわかりませんが、国試には必要です。今学んでいる人たちは優秀な人たちで僕のようにサボっている人たちはいないと思いますが、もしいたらせっかくの機会を僕のように無駄にしないでください。

卒業後は大学院に進学し、いまだに足りないものを補いながら、自分を成長させたいと思います。これからも多くの人に迷惑をかけていくと思いますがよろしくお願いします。

春

6年 濃野 要



春は枝頭に在って已に十分といます。これは「鶴林玉露」の、ある七言絶句の最後の句です。この言葉を知ったのがいつのことだったかは記憶にありませんが、すごく感心したことを覚えています。実際のところ、解釈にはいろいろあるようですが、そのうちの一つ、「春」を「幸せ」と考える解釈が一番好きです。ご存知の方も多いと思いますが、この句は、春を待ちわびた男が、方々に春を探しに行くけれども、どこにも見つけることができない。落胆しつつ家路に就き、家の門をくぐったときに、軒先にある梅の木に目が行き、その梅の枝を一本折ってそのにおいを嗅いだところ、そこにはもう春が来ていた。と言う意味のもので、そこから転じて、人は幸せを遠くに求

めようとしがちであるが、それはそんなところに求めるのではなく、日常にある、平凡な、何でも無いものの中に在るものである。と解釈するのだそうです。この話を聞いたのはずいぶん前の事になるので、話の詳細についてはあまり自信がありませんが、大筋は間違えていないはずです。

歯学部生活を終えるにあたり、自分の6年間を振り返ると、思い出されるのは、月並みではありますが、やはり総診で過ごした一年間です。未熟な自分にご自分の口を任せてくださった患者さん、そして右も左も分からない学生に対し、優しくときに厳しくご指導下さったライターの先生方にはいくら感謝しても足りません。本当にありがとうございました。そして、わがままな僕に付き合ってくれた仲間にも感謝したいと思います。

思えば、この一年は技工室での生活時間が一番長かったように思います。そしてこの技工室での生活はいわゆる共同生活であり、周りの人たちとの関係が、先の5年とは比べものにならないほど強かったように思います。不器用な僕にとって技工は苦手以外の何者でもなく、自分一人の力では手に負えないことが多々ありました。しかし、その度に手の空いている人が嫌な顔一つせずに手伝

ってくれました。このときほど友達のありがたみを感じたことはありませんでした。もちろんこれだけではなく、プレゼンの準備やレポートの作成など、お互いに協力しあって為しえたことが多々あります。それに、総診で失敗したり、怒られたりしても、技工室に帰れば、周りの人たちが慰めてくれました。そのおかげで総診の生活を破綻なくやってこられたのだと思います。

今、この慣れ親しんだ仲間の多くと別れを迎えることになり、非常にくさい言い方ですが、自分にとっての「春」はここにあったのだということ、つまり、この仲間たちと苦楽をともに出来たことだということがわかりました。

自分はこの後も、この大学の大学院に残ることになっています。ですから、これから春が来るたびに、残念ながら梅ではありませんが、僕たちが一緒に苦勞した総診から見える、あの桜を観ることになるでしょう。そしてその度に「春」を、この仲間のことを思い出すでしょう。その思い出を胸に、そしてこの初心を忘れずに、医療人として、患者さん一人ひとり、ひいては地域全体に貢献していきたいと思います。